

第一節 限りある命だからこそ

命には限りがある

今も 昔も変わらない道理が

インターネットの普及により、世界で起きているニュースがタイムリーにアップされま
す。政権の交代や自然災害などの大きな事柄から、小さな話題まで数えきれず、世の中は
絶えず移り変わっていることが分かります。そして、日本でも、一日のうちに死を迎える
人が三千人を超えているように、どれほど素晴らしい功績を残した人でも、いつかはこの
世を去る時が来るのが常です。この道理は、昔も、今も変わりません。

先人たちはどのように

そうした宿命の下にある世の中で、先人たちはどのように生きてきたのでしょうか。天
下統一を目指して覇を競った戦国武将たちや、日本の敗戦後、国の発展に尽力した団塊の

世代の人たちもいます。世界に目を向ければ、貧困に苦しむ人々に手を差し伸べ続けた修
道女や、感染症で命を落としていく人々を救おうと、治療薬や予防薬の開発に心血を注い
だ医師たちもいました。それぞれの時代背景においてやるべきことを見いだし、力を尽く
してきた人たちがたくさんいます。

寿命があるものだから

もし、命が永遠に続くものであったなら、時間を惜しみ、人や物を大切にしようとする
思いは、それほど強く持てないかもしれません。桜は、他の花に比べて開花期間が短い
からこそ、人々は咲き誇る花の姿を掛け替えのないものとして、この時とばかりに楽しもう
とします。犬や猫などのペットも、人より寿命が短いからこそ、一緒に過ごす時間が大事
に思えることでしょう。命は、いつか終わります。物も、時間とともに古くなり、壊れま
す。だからこそ、一つ一つの命に価値を感じ、大切にしていけるのではないのでしょうか。

寿命のある同士が関わる中で

神示を通してこの世の真理が

命以外にも、人の力ではどうすることもできないものが、この世には多々あります。例
えば、時間は止められない、地球には重力がある、朝日は東から昇る、人間には男女の性
別があるなど、仕組みそのもの、つまり真理です。その中でも、生きる上で欠かせない真